●●●代用監獄の廃止を求める市民集会「このままでいいのか?! 代用監獄」

“自白強要と冤罪の温床” 代用監獄に今こそ反対の声を

●法整備に向けた活動の現状

2月24日，弁護士会館クレオにおいて，日弁連と東京三会の四会共催により，代用監獄の廃止を求める市民集会「このままでいいのか?! 代用監獄」が開催されました。

集会では，まず，日弁連刑事拘禁制度改革実現本部本部長代行である西嶋勝彦弁護士から，基調報告として，諸外国では警察拘禁は短時間に制限されているのに対し，日本では代用監獄への勾留は例外かつ暫定的なものとされながらも，現在では，98％以上の被疑者が留置場に収容される逆転現象が続き，代用監獄を利用した虚偽の自白，冤罪等の弊害が発生している現状が報告され，「未決拘禁者の処遇等に関する有識者会議における提言」が今次法整備に当たって代用監獄の存続を認め，廃止・漸減の方向性を盛り込まなかった点についての批判，及び，今後の未決拘禁法案国会審議に向けて，代用監獄を将来的には廃止の方向での修正を求める方針が明らかにされました。

その後，有識者会議の委員として代用監獄存続に反対をしてこられた菊田幸一弁護士から，日弁連は，長い歴史の中で真摯に代用監獄反対・廃止に取り組みながら，この間の対応や反対に向けての運動は甚だ不十分だったのではないかという厳しい指摘がなされました。

●ゲスト・パネラーらが語る代用監獄の実態

その後，集会ゲスト・パネラーで自衛隊官舎で反戦ビラを撒いたために逮捕された立川テント村の高田幸美さんから，代用監獄の中では，「被疑者は，自分が正当な人権を尊重されてもいい存在だということがわからなくなり，徹底的に服従させられる，そういう場所だと思います」として，高田さん自身が受けた留置担当警察官による弁護人との秘密交通権の侵害や，裁判準備妨害，自白した者には処遇上特典を与えられ，黙秘，否認している者は罵詈雑言を浴びせられ真夜中まで取調べが繰り返されるという現状が報告されました。

また，ゲスト・パネラーで痴漢冤罪の被害者の矢田部孝司さんは，否認を貫いたため92日間も代用監獄に入れられ，代用監獄の中で上司から辞職を強要されたいきさつ，捜査の刑事の意を受けた同房者から自白するよう説得されたことなどをリアルに話してくれました。

さらに，ゲスト・パネラーで「家栽の人」の原作者である作家毛利甚八さんから，鹿児島事件における代用監獄を利用した自白強要の実態が非常に克明なルポルタージュとして紹介され，「代用監獄が自白強要と冤罪の温床である現実は，決して戦後間もなくの話ではないのだ」ということを思い知らされました。また，毛利さんは，代用監獄の問題点のみならず，拘置所における処遇も決して人権に配慮したものとは言えず，改善すべきである点を指摘されました。

その後，レゲエ・シンガーでもある高田さんの1曲ライブ（写真）で雰囲気が盛り上がったところで，海渡雄一弁護士をコーディネーターとして，ゲスト・パネラーの方々に小池振一郎弁護士（日弁連刑事拘禁制度改革実現本部事務局長）を加えたパネルディスカッションが行なわれました。

●諦めず，廃止に向けた取り組みを展開

どの企画も一度にやるのがもったいないような内容の濃いもので，それに対して，集会参加者が百数十名程度に止まったのは，情宣不足の故か，何とも残念でした。

また，本集会後の3月，未決拘禁法案が閣議決定され審議入りしましたが，代用監獄の漸減・将来的廃止を目指すべく，諦めず反対の声を上げ続け，今後も代用監獄廃止に向けた取り組みを展開していきたいと思います。

（刑事拘禁制度改革実現本部委員　寒竹 里江）